



デュルケーム／デュルケーム学派研究会

Japanese Association for Durkheimian Studies

ニューズレター

第13号 [2012年12月25日発行]

会長 大野道邦 <mitikuni@mua.biglobe.ne.jp>

郵便振替口座番号：00980-4-20999

編集事務局 奈良女子大学文学部

(口座名称) デュルケーム研究会

TEL 0742-20-3264, 3259

編集 中島道男

江頭大蔵

小川伸彦

<mnakajima@cc.nara-wu.ac.jp><egasira@law.hiroshima-u.ac.jp><ogawax@dream.com>

デュルケーム／デュルケーム学派研究会の趣旨

世紀転換期のグローバルなレベルにおける社会的、文化的な変化の中にあつて、最近、国際的にも国内的にも、デュルケームやデュルケーム学派の業績の再評価の機運が高まってきている。わが国においても、若い世代を中心としてデュルケーム／デュルケーム学派に関心を抱く研究者が増えつつある。

このような状況を考慮に入れつつ、前世紀転換期の古典であるデュルケーム社会学、および、その発展型としてのデュルケーム学派について調査・研究することによって、現世紀転換期の社会・文化・人間の構造や動態を分析・説明・解釈するための基礎的・原理的なパースペクティブを明らかにしたい。このために、相互啓発的な研究会を定期的開催する。

第24回研究例会 (2012年4月14日、上智大学 四谷キャンパス)

報告1 金 瑛 氏 (京都大学)
アルヴァックスの集合的記憶論

コメンテーター：大野道邦 氏 (京都橘大学)

報告2 太田健児 氏 (尚絅学院大学)
『宗教生活の原初形態』における「カテゴリー論」再考

コメンテーター：伊達聖伸 氏 (上智大学)

第25回研究例会 (2012年10月13日、別格本山 大円院)

報告1 池田祥英 氏 (早稲田大学)
タルドのモナド論について

コメンテーター：三上剛史 氏 (神戸大学)

報告2 岡崎宏樹 氏 (京都学園大学)
沸騰の社会学——方法論的探求

コメンテーター：梅澤 精 氏 (新潟産業大学)

【第24回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 金 瑛（京都大学）

アルヴァックスの集合的記憶論

アルヴァックスの集合的記憶論は、社会学における記憶論の隆盛とともに再評価が進んできた。だがその一方で、集合的記憶という概念の含意や射程が十分に吟味されてきたとはいえない。そこで本報告では、集合的記憶という概念の再考を通じて、アルヴァックスの記憶論の意義をベルクソンやデュルケームとの比較によって検討した。

まず行なったのが、きわめて曖昧に使用されている記憶という概念の吟味である。アルヴァックスは、*mémoire*（記憶）と *souvenir*（思い出）という概念の使い分けをしている。記憶は、過去を記録・保持・想起する意識の作用・活動であり、思い出は、その作用の対象となる過去のイメージ・表象である。ここで重要なのは、思い出がある特定の過去のイメージとして静態的に捉えやすいのに対し、デュルケームやベルクソンが心的な生の流れに喩えたように、作用である記憶は動的なプロセスとしてしか捉えられない実在だということだ。実際にアルヴァックス自身も、記憶を随所で「連続した流れ」として記述し、その動態性と連続性を強調している。

ここから、時間の流れの中での人格の時間的な連続性・自己同一性という記憶の含意が導き出せる。したがって集合的記憶は、記録・保持・想起という一連のプロセスから派生してくる集団の時間的な連続性・同一性、過去から未来に向かって持続する「われわれ」という意識として定義できるだろう。個々人が集団レベルで過去を有意味なものとして想起するのは、この意味で解された集合的記憶を前提としてはじめて成立する事態である。

では、集合的記憶はいかにして成立するのか。アルヴァックスは、集合的記憶が言語活動・時間・空間という「枠組み」によって成立すると考えた。この中でもアルヴァックスが重視しているのは、集団が持続しているという時間感覚（すなわち時間の「枠組み」）を空間の「枠組み」がいかにして担保するのかという点である。そして、この空間の「枠組み」は「環境（milieu）」として概念化された。

「環境」は、主体の外部において過去の痕跡を保存する空間ではない。アルヴァックス自身が、博物館や図書館に残る痕跡は、主体と無関係な場合には想起をもたさないと述べている。アルヴァックスが「環境」として捉えているのは、主体と不可分な存在条件として、つまり主体がその中に絡め取られた関係の網の目として主体に認識される空間性である。過去を想起する個人という主体は、この関係の網の目に絡め取られたとき、つまり「環境」と一体化していると感じる場合に、集合的記憶に参加し過去を集合的に想起するのである。それゆえ忘却は、この「環境」に個人が入り込めない事態、「環境」から個人が離脱してしまった事態として説明される。アルヴァックスは、このような「環境」を構成する力の原理として法・経済・宗教について考察し、それぞれの機能分化した力によって形成される「環境」のあり方について論じた。

では、以上のようなアルヴァックスの議論をデュルケームと接合する可能性はあるのだろうか。本報告で着目したのは、諸個人の結合によって社会という独特の実在性を有したシステムが生まれるというデュルケームの関係主義的な視点と、彼が社会的過程の最初の起源を「内的社会環境」の構成のうちに求め、社会形態学を構想したという点である。また両者は、社会関係の端緒、社会関係が劇的に組み替えられる端緒として「沸騰（effervescence）」に着目しているという点でも一致している。したがって、両者の理論の接合は、集合的記憶を静態的ではなく動的に記述するための重要な基盤となりうるだろう。

『宗教生活の原初形態』における「カテゴリー論」再考

『宗教生活の原初形態』（1912、以後『原初形態』と略記）はデュルケームの道德論研究の集大成と位置づけられる。本論部でオーストラリアの原住民の原始的で土俗的な宗教の観察データが記述され、本論部のみに言及する研究が多いようだが、むしろ序論、結論部の論旨にも着目すべきであり、結論部での終着点がなぜカテゴリー論になってしまったのかその論脈の解明が重要である。

序論の問題設定は生得論（＝理性論）と経験論との拮抗問題とその統合との問題提起がなされているが、実は論理学上の同一律が神話的世界観では破綻している事態を出発点としている。つまり、一と多、物質と精神、要素群の離合集散による自己構成と自己解体などの対立項が、そこでは同一律になっており、これらを説明するため認識の課題は新しい用語で提起される必要があるという。そこで、カテゴリーの形成という面で経験論と理性論とが吟味されるが、幾世紀も互いに衝突してきた二学説はいずれも採用されない。経験論は、個々人の雑多な経験から主観性や個別性が捨象され、カテゴリーが抽象化され、普遍性、非個別性を得る過程が説明できない。また、各カテゴリーの総体が理性と命名されてしまうが、理性は経験に還元され得ず、経験の産物ではない。他方、理性論は、経験に全て還元され得ない部分（ア・プリオリな部分）を主張するが、その存在証明、その源泉、作用のメカニズムなど、実験・検証を経ていない。

その上でア・プリオリのさらにア・プリオリが求められる。つまり最も直截な考察対象が因果関係あるいは論理自体に絞られる。特に論理自体については、論理破綻（同一律の破綻）という逆の実例（諸界の混同、最も異質な事物・人・動物・植物・星などの同一視）によって、人・動物・植物・岩石が同じトームを帯びるメカニズムでもって考察される。そしてこのトーム現象こそ当該社会の論理そのもの、カテゴリーそのものとされ、社会の産物という定式が導出される。因果関係、論理自体は集合体の所産で、集合的行動の必然性が根拠である。カテゴリー自体は自明でも所与でもなく、社会による構成という循環論的なア・プリオリのア・プリオリが示されるに至る。

しかし、それでもなぜカテゴリー論なのかという問いは残る。いくつかの仮説が考えられる。例えば、デュルケームは、ルヌヴィエ(Charles Renouvier, 1815-1903) 経由のカント哲学を批判しながらも、その哲学の枠組みの中での議論、用語借用などが多い。カントの「定言命法」はフランス語では *impératif catégorique* であり、カテゴリー(*catégorie*) に従った命令という意味である。カントの認識論の実証社会学版を目指したのか？なるほどデュルケーム自身、哲学・倫理学研究の最先端こそ社会学研究であると自負していた。またカテゴリー論は当時のトレンドであり、デュルケーム学派共通の問題意識であり、当時哲学者たちとの論争点だった事は『社会学年報』から判明する。当時の哲学者でフランス新カント学派のアムラン(Octave Hamelin, 1856-1907) への言及もあるが、アムランは時間・空間のカテゴリーを研究していた。これ以外にも、本研究ではデュルケームの解釈学的な（ディルタイ等の）カテゴリー論展開だった可能性、ライクな道德論構築の一環だった可能性（価値転換による新たな価値論創出を含む）、フッサール現象学に似た理論枠組の未完のプロジェクトだった可能性等々予想するのであるが、この証明には『原初形態』のさらなる厳密な読解が必要である。

*文中の一つ一つの註はここに記していない(D 研発表時レジュメに記載)。尚、『原初形態』の本論部分の解釈及び「集合表象」の原義等については、以下の拙稿で言及している。

cf) 拙稿, 2011, 「E.デュルケームとの対話 — 古い神々は死に、他の神々はいまだ生まれていない —」『社会学雑誌』27・28号, 神戸大学社会学研究会: 28-44.

【第25回研究例会報告要旨】

〔報告1〕 池田祥英（早稲田大学）

タルドのモノダ論について

今回の報告では、近年ドゥルーズらとの関係で取り上げられることの多いタルドのモノダ論について、「モノダ論と社会学」(Monadologie et sociologie, *Essais et mélanges sociologiques*, 1895 所収)における主張から検討し、さらにそこでの主張と彼の社会学理論との関係を探る。

タルドは、社会をその構成要素である諸個人から出発して説明しようとする。他の科学が対象を分子や原子、細胞といった小さな要素に分解して考えているのと同じように、社会学においても、国民や民族といったものから出発するのではなく、個人から出発すべきだとタルドは考える。このように考えるならば、集団から個人へ、個人から細胞へ、細胞から分子へ……というように無限に構成要素を掘り下げていくこともできる。通常はそれぞれの科学においてはすぐ下の要素（たとえば社会を構成する個人）までしか立ち戻らないが、タルドはこうした無限小の要素をつねに意識すべきだと考える。

こうして、様々な現象の構成要素に立ち戻る場合、精神がどのように生じるのかという問題に突き当たる。タルドの解決法は、あらゆる要素を精神的なもののみならずというものであった。彼は精神と物質は別々の存在であるという前提に立つ二元論を否定し、すべてのものの根源は精神にあるという精神の一元論の立場を取る。つまりすべてのものが何らかの精神的な性質を持っていることになる。このような立場をタルドは「擬心論」(psychomorphisme)と呼ぶ。また、それぞれの要素が無秩序に動くのではなく、ある程度連携しあってひとつの全体を作り上げることについて、ライプニッツのように「予定調和」として考えるのではなく、それぞれのモノダが互いに開かれていて、相互にコミュニケーションしあっているのだと考える。そして、あらゆる現象が精神的な微粒子の集合体であるということは、それを一種の社会とみなすことができるということに他ならない。このような考え方は必ずしもタルドだけにみられるわけではなく、たとえば同時代の社会学者アルフレッド・エスピナスもまた、その著書『動物社会』(1877)において、「社会」という概念を人間の社会に限定せず、生物に対して適用している。

このように考えることでタルドは、いわゆる「創発特性」という考え方——現象はその構成要素の総和ではなく、要素が集まることで新たな特性が生じると考えるもの——に対して疑問を呈している。とりわけ、社会現象を考えるうえでは、観察者であるわれわれ自身がその構成要素となっているため、構成要素としての個人とその化合物である集団や社会を共に直接に経験することができるという特権的な立場にいる（それに対して、たとえば生物について考える場合には、われわれは細胞そのものを体験することはできないので、その点については推測に頼らざるを得ない）。また、化合物はその構成要素よりもつねに単純であり、人間の社会は要素である人間そのものと比べて単純な構造になっているということもタルドは強調している。

最後に、タルドはそれまでの存在 (être) に基づく哲学に代えて、所有 (avoir) に基づく哲学を唱える。存在として考える場合は「あるかないか」という以上のものでないのに対して、所有として考える場合は、形態や程度として様々な段階を想定することができるため、より優れていると考えられる。デカルトの「われ思う、ゆえにわれあり」に対して、タルドは「われ信じ、欲する、ゆえにわれ所有す」と考えるべきだと主張している。

以上、かなり雑然とではあるが、タルドのモノダ論について「モノダ論と社会学」における主張を中心に検討した。このようなモノダの原理は、その後のタルドの社会学理論においても前面に押し出されてくることはなかったが、ここで取り上げられた議論の一部は、タルド社会学において重要な位置を占めることになる。まず、創発特性の否定は、タルドの社会学の根本をなすものである。また、差異を出発点に置き、そこから同化が起こって最終的にはまた差異化が起こるという考え方も、デュルケムの有名な機械的連帯から有機

的連帯へというモデルを批判する論拠として用いられることになる。また、あらゆる現象を社会学の枠組みの中でとらえようという当初の壮大な試みは実行に移されることはなかったが、タルドは晩年に「心間心理学」(inter-psychologic) という社会的なものに限らない相互作用全般を対象とする学問分野を想定している。

今日ではおそらく、モナド論を用いることでこれほどまでに社会学と自然科学との同列性を主張する必要はないと考えられるが、これは科学としての社会学が確立されるために通らなければならなかった道であったと考えられる。いずれにしても、タルドのモナド論は社会学理論から完全に切り離された形而上学的理論とみなすべきではなく、彼の社会学理論の根底にあってその方向性を決める役割を果たしていたことは確かであろう。

〔報告2〕 岡崎宏樹（京都学園大学）

沸騰の社会学——方法論的探求

「沸騰」とは「内部から気化が生じる現象」(『広辞苑』) である。それは形あるものと無定形なものとの境界状態を示す語である。「沸騰」は、個人意識と集合意識の区別(人間の二元性)、客観的な観察者と行為者の区別(実証主義の前提)があいまいとなる両者の境界領域において生成する出来事であるといつてよい。

本報告は『宗教生活の原初形態』[1912]で重要な概念として語られた「沸騰」に注目することによって、デュルケーム社会学の認識と方法が晩期に至って根本的な転回を示しつつあったことを論じる。

まずデュルケームの著作を年代順にたどり、「沸騰」の語が「価値判断と実在判断」[1911]や『宗教生活の原初形態』の段階に至って、きわめて重要な理論的意味が付与されたことを確認する。ついで、「宗教的観念が生まれたと思われるのは、この沸騰した社会環境における、この沸騰そのものからである」という一節に注目し、「沸騰そのもの」と「集合的環境」をいったん切り離し、両者の相互関係を把握することを試みる。ここから引き出す論点は、宗教的観念は「沸騰そのもの」の《体験》をとおして形成されるということである。沸騰状態の主体は、無差異の場に身を置くが、ここから基本的な分節の線が立ちあがるのだ。だが、デュルケームは、「沸騰した社会環境」から聖のシンボルが生まれるという論点の方をむしろ強調している。つまりデュルケームは脱自＝恍惚(「沸騰そのもの」「生命的エネルギー」)の特異な位相に目を向けてはいるが、理論的には「沸騰」を集合体の体験として解釈し、「社会から社会制度が生まれる」という論理を展開しているのだ。

ここには、制度化された制度(トーテミズムの儀礼)から制度化(生成)を探求するという方法論的難点が存在する。大野道邦氏は「意味作用としてのシンボリズムは沸騰に内在的であり、これを能動的に構成するという『構造化の原理』となりうる」と指摘し、「集合的思考＝意味作用＝構造化の原理は、ある日、突然、一挙に、世界を分節化し構造を与えたのである」から、「別の日に、突発的に、一挙に、新たな分節化が出現し秩序＝構造が一新される可能性」があると論じている[大野 2001:12,14]。

本報告は、「分節化されたもの」と「分節化されないもの」のダイナミックな関係を論じた、マイケル・ポランニーの暗黙知理論を参照することで、秩序創造のプロセスを考察する。「沸騰」とは、固定的な意味(包括的全体)に統合されない「非分節的なもの」(諸細目)の自由な運動性である。生命力の体験(「沸騰そのもの」)は、圧倒的強度の感情を喚起するが、これに「焦点的意識」が向けられると、既存の意味や枠組みが消失し、脱自の体験が起こる。意味秩序の危機によって、非分節的な体験から意味を創造する生命活動の活性化され、非分節的な生をとらえる「枠組み(聖俗のカテゴリー)」が創出される。これによって非分節的な「共同の生」を包括する新たな「意味」が形成される。これは新たな生のパースペクティブと意味秩序の創造とみなすことができる。

本報告は、さらに、『宗教生活の原初形態』の原資料となった、Spencer&Gillen [1899a,1899b], Howitt [1904], Stiehlow [1907ff] らの著作に注目し、デュルケームがこ

これらのテキスト（文章・写真・図）から読み取った「現実」への「棲み込み」によって、テキストと自己の経験（諸細目）を統合し、新たな社会学的意味（包括的全体）を創造したことを示す。デュルケームに宗教体験（沸騰）の内側からの記述を可能にしたのは「棲み込み」（ポランニー）なのである。

また本報告は『プラグマティズムと社会学』において晩年のデュルケームが生成と定着をどのように把握したかを考察し、そのまなざしが生成と定着（沸騰と制度）のあいだの「関係」に向けられていたことを確認する。その方法論は、生成の〈場〉に棲み込み、体験の表現を通じて生に関する部分的真理を探究する社会学的研究の方法を示唆する。本報告は、最後に、「沸騰からの社会学」に大きな示唆を与える研究として、西川長夫氏の『パリ五月革命 私論』[2011]に言及する。

【書評】江頭大蔵（広島大学）

Baudelot, Christian and Establet, Roger, 2006, *Suicide: l'envers de notre monde*, Paris, Éd. du Seuil. (= 2012, 山下雅之・都村聞人・石井素子訳『豊かさのなかの自殺』藤原書店.)

本書は『自殺論』刊行から百年以上経過した今日において、その間に蓄積されてきた世界各国のデータを分析することで、自殺がどのような社会的背景のもとに生じるのか、自殺と社会現象の関係を再検討しようとする試みである。著者たちはその際、デュルケームが用いた分析方法（社会的カテゴリーごとに集計した自殺率の比較）に依拠しつつも、「貧困が自殺から人々を保護する」といった豊かさと自殺の関係についてのデュルケームの命題が今日の豊かな社会には当てはまらないことを示し、自殺と他の社会諸現象との関係には根本的な変化が生じたことを指摘する。

本書については既に養老孟司（『毎日新聞』2012年7月29日）や菊谷会員（2012c）による書評なども参照できるので、ここでは自殺率の地域的分布の分析を中心に議論の展開を追い、日本社会におけるデータにも本書の知見が適用できるか検討を加えてみよう。

「男性の自殺率」と「1人当たり GDP」を縦／横の軸に取って各国のデータを散布図に示すと（39頁 図1）、相対的に貧困で自殺率が高い旧ソ連・東欧圏諸国の一群を例外として、豊かな国ほど自殺率が高いという相関関係が現れる。しかし豊かさと自殺についてのこの関係は、日本をふくめ最も豊かな国々の「内部」では支持することができない。アメリカ、イギリス、フランスなどでは、都市化して経済的に豊かな地域では自殺率は低く、「自殺率が最高となるのは、中心部や都市部ではなく、最も貧困な都市周辺部においてである。」（41頁）現代の豊かな社会においては、貧困はわれわれを自殺から守ってはくれなくなっているのだ。

デュルケームが『自殺論』を著した19世紀の社会では、経済発展は個人主義や個人の孤立をもたらし、その帰結として自殺率が上昇した。当時は、経済発展と平行して自殺率も上昇するという関係があった。しかし、この関係は20世紀を通して徐々に変化して行き、購買力が上昇しても自殺率は横ばいか低下さえするようになる。そして、自殺率が上昇局面に入るのは、購買力が低下もしくは停滞したときとなった。豊かさは、ある面で人々を自殺から保護する効果があるとさえ思われるのである。（第3章）

著者たちによると、このような変化は経済発展がもたらした豊かさが労働の意義を変え、さらには人々と社会との結びつき方を変えたことと関係している。豊かな社会における労働は単に食べるためのものではなく、それを通して他者と結びつき、他者から承認を得、信頼関係を築き、自己有益感をもたらす、すなわち人々を社会に統合する性質をもつようになる。学歴が高く、資格を持ち、報酬が多い、知的で雇用が安定した職業ほどそのような特性を持つだろう。しかもそのような職業が大都市圏に集中しやすいの言うまでもない。これに対して豊かな社会では人間関係上の孤立は貧困層に襲いかかる。多くの人々が平等に貧しく、それ故に助け合っていた時代の「統合された貧困」とは異なり、豊かな社会で労働市場から排除された人々の「地位剥奪的な貧困」は、経済的社会的な生活への

参入の機会を徐々に奪い、自己の価値貶下を引き起こす。この新たな形態の貧困は、先進諸国で不安定雇用や非正規労働が増加したのと軌を一にして増えているという。(主に第4章、第7章、第8章)

自殺率が中心部の大都市圏で低く、周辺の地方で高いという地理的分布は、年齢調整自殺率*によって地域間の比較が直接できるようになった1970年の日本のデータにも既にその片鱗を見ることができる。評者はまだ十分に分析を掘り下げているわけではないが、ここではこの傾向がより明確な2005年の都道府県別データを利用して、このような地理的分布に影響する諸要因を検証してみよう。

都市化と関連する様々な指標の中でも、年齢調整自殺率との関連が一貫して強いのは被雇用者の給与水準**で、相関係数は -0.725 にもなり(相関係数の符号がマイナスなので、給与水準が高い地域ほど自殺率が低いことを意味する)、都市化の直接的指標といえる人口密度(-0.361)や人口集中地区人口割合(-0.394)、自殺との関連が深いと思われる完全失業率(0.311)よりも関連が強い。労働人口における被雇用者割合との相関(-0.541)の高さも勘案すれば、現代では自殺が働き方に深く関わっている現象だということが推測できる。***

興味深い分析結果が現れたのは、自殺率と給与水準そして都市化(人口密度)の相互関係である。これらの3変数は相互に関連し合っていて、人口密度が高いほど給与水準も高く、人口密度や給与水準が高いほど自殺率は低い(図1)。さらに、相互の相関関係だけにとどまらず、自殺率を従属変数、給与水準と人口密度を独立変数とする重回帰分析のモデルにデータを当てはめてみると、都市化の影響の複雑さが見えてくる(図2)。

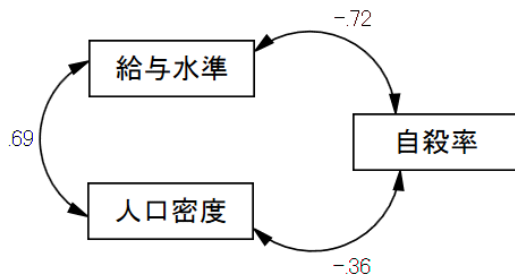


図1

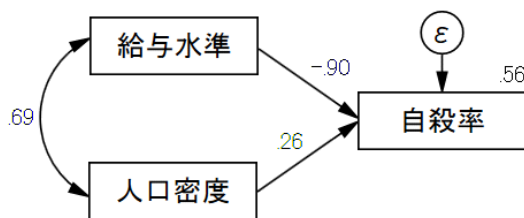


図2

図2によると、自殺率を説明する給与水準の標準化係数は -0.904 にもなり、その一方で人口密度の係数は 0.260 と符号がマイナスからプラスに反転してしまった。これらの数値は、都市化の程度が同じなら、高い給与水準はより一層強い影響を自殺率におよぼしてこれを低下させ、他方、給与水準が一定であれば、都市化は自殺率を上昇させる傾向があることを意味している。都市は、十分な報酬で労働に報い、自己実現や社交性を活性化する仕事を人々に与えるが、都市の環境そのものは自殺を促進する効果を持ち続けているようである。これらのことは、大都市圏で自殺率が低いのは労働により得られた生活の豊かさによるものであるという本書の主張を、より明確に裏付けるデータであるといえるだろう。

『自殺論』の分析が現代社会の状況と合致しない点も多い。例えば、欲望に彩られたバブル経済の時代、日本ではアノミ的自殺が跋扈するどころか、オイル・ショック以降では当時が最も自殺率が低かった。豊かさとの関係を軸に、自殺と社会現象の関係を再構築しようとする本書の、現代における自殺を理解する上で果たす役割は大きい。もちろん、自殺と豊かさの関係が統合理論で媒介されているように、デュルケムの自殺理論が根本的に覆ったわけではない。本書の含意は、経済的地位と社会統合の関係が変わった、いかえれば家族・親族や地域社会、宗教的コミュニティを通してではなく、職業生活を通して人々が社会に結びつくようになったということである。そうであれば、これまでほとんど評価されなかったようにも思えるデュルケムの社会計画、すなわち職業集団の再建により自殺を予防するという展望を、著者たちがどのように評価するのか試してみたい。

* 年齢別人口構成を同一にして補正した自殺率。自殺率は年齢による差異が大きいため。

** 『賃金構造基本統計調査』より産業計・男子の「決まって支給する現金給与額」。

*** 自殺率、給与水準、失業率については男性のみの数値。

【 会 員 業 績 】

- 安達智史, 2012a, 「ニューカマーの子どもたちと学校適応——家族資源の観点から」『社会学年報』41: 43-54.
- , 2012b 「[書評] 仁平典宏著『「ボランティア」の誕生と終焉?〈贈与のパラドクス〉の知識社会学』『社会学評論』249: 175-6.
- , 2012c 「リベラルな多文化主義における文化とアイデンティティ——再帰性、エージェンシー・モデル、自律性」『社会学評論』250: 274-89.
- , 2012d 「[海外の動き] 現代イギリスの社会統合」『Migrants Network』154: 18-9.
- 大川清丈, 2010a, 「新聞投書欄から見た『受験』と努力主義」尾中文哉・大川清丈・白鳥義彦『試験関連記事に関する比較歴史社会学的考察 (中間報告)』2007 年度～2009 年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書, 6-17.
- , 2010b, 「努力主義の日英比較——『逆欠如』という観点から」尾中文哉・大川清丈・白鳥義彦『試験関連記事に関する比較歴史社会学的考察 (中間報告)』2007 年度～2009 年度日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書, 18-22.
- , 2010c, 「日本人論の系譜——南博『日本人論』(1994)」井上俊・伊藤公雄編『社会学ベーシックス 10 日本の社会と文化』世界思想社, 197-206.
- 太田健児, 2011, 「E.デュルケムとの対話——古い神々は死に、他の神はいまだ生まれていない」『社会学雑誌』(神戸大学社会学研究会) 27・28: 28-44.
- , 2012a, [共著]「きょうもボランティアは続く——新しいコミュニティづくりによる幸福再生への道筋」東北大学高等教育開発推進センター編『東日本大震災と大学教育の使命』東北大学出版会, 203-214.
- , 2012b, 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅶ——デュルケム中期道德教育論Ⅴ:『道德教育論』その3」『尚絅学院大学紀要』63: 59-69.
- , 2012c, 「フランス第三共和制期世俗的道德教育論の諸相Ⅷ——デュルケム中期道德教育論Ⅵ:『教育学と社会学』」『尚絅学院大学紀要』64: 87-100.
- 大野道邦, 2012, 「ソローキンとパーソンズ——『文化システム』概念をめぐる」『京都橘大学研究紀要』38: 125-143.
- /コルネーエヴァ・スヴェトラナ, 2012, 「ソローキン文化社会学の知識社会学的考察——コミ、革命、ハーヴァード」『京都橘大学大学院文化政策学研究科研究論集』6: 1-18.
- 岡崎宏樹, 2012, 「暴力と贈与」『日仏社会学年報』22: 151-65.
- 川本彩花, 2010a, 「芸術至上主義の社会学——ベートーヴェンにみる芸術性と商品性の関係」『フォーラム現代社会学』9: 101-12.
- , 2010b, 「(特集・連続討議・市場経済と芸術Ⅳ) 芸術・貨幣・対話」『あまだむ』(あまだむ短歌研究会) 109: 18-20.
- , 2012a, 「(音楽の自律性)の形成におけるメディアの役割——音楽雑誌のベートーヴェン批評を手がかりに」『ソシオロジ』56(3): 87-102.
- , 2012b, 「音楽社会学の課題——新たな〈クラシック音楽の社会学〉をめざして」『社会システム研究』(京都大学大学院人間・環境学研究科) 15: 13-22.
- ・森山貴仁・野島那津子, 2010, 「メディアによる文化的公共圏の再編成——戦後における音楽祭の日米比較を中心に」『京都大学グローバル COE プログラム「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」ワーキングペーパー』.
- 菊谷和宏, 2012a, 「[書評] 中倉智徳著『ガブリエル・タルド 贈与とアソシアシオンの体制へ』(洛北出版)」『図書新聞』3048 (2月4日): 5.
- , 2012b, 「[書評] 伊達聖伸著『ライシテ、道德、宗教学 もうひとつの19世紀フランス宗教史』(勁草書房)」、『日仏社会学年報』21: 99-102.
- , 2012c, 「[書評] Ch・ボードロ+R・エスタブレ著『豊かさのなかの自殺』(藤原書店)」『週刊読書人』2951 (8月10日): 4.
- , 2012d, 「身体・他者・社会 —— 生の社会学への道標」『和歌山大学経済学会研究年報』16: 99-117.

- 金瑛, 2012, 「集合的記憶概念の再考——アルヴァックスの再評価をめぐって」『フォーラム現代社会学』(関西社会学会) 11: 3-14.
- 嶋守さやか・青木佐和・伊藤絵里奈・八反彩織, 2012, 「スウェーデンの環境教育、「森のムッレ教室」を实践して」『保育子育て研究所 教育保育研究所年報』10: 23-31.
- ・鈴木淳子, 2013, 「東京都山谷地域における看護ケアの現象学的考察」『桜花学園大学保育学部研究紀要』11: 27-43.
- 白鳥義彦, 2012a, 「現代フランスにおける『結社』」『紀要』(神戸大学文学部) 39: 19-37.
- , 2012b, 「公開研究会報告：日仏大学改革の比較研究」『日仏教育学会年報』18 (通巻番号 No.40) : 65-66.
- , 2012c, 「フクシマ以後の大学 日仏大学人の対話の試み」『科学・社会・人間』121 (2012年3号): 39-40.
- , 2012d, [翻訳] クリストフ・シャルル著「ヨーロッパ=アメリカの観点から見た、1945年以降のフランス大学システムの変容」『日仏教育学会年報』18 (通巻番号 No.40) : 67-80.
- , 2012e, [翻訳] シャルル・スーリエ著「フランスの原子力に関する考察のためのいくつかの要点」、『科学・社会・人間』121(2012年3号): 45-51.
- , 2012f, [翻訳] クリストフ・シャルル著「フランスにおける原子力——エリートに関する歴史学者によるいくつかの考察」『科学・社会・人間』121(2012年3号): 54-58.
- 多田光宏, 2012a, 『社会的世界の時間構成——社会学的現象学としての社会システム理論』早稲田大学大学院文学研究科社会学コース提出博士論文.
- , 2012b, “Theory of the Social, Theory as the Social: On the Self-Application of Sociological Theory,” *The Journal of Social Sciences and Humanities* (JINBUN GAKUHO), *Sociology* 47: 27-49.
- 伊達聖伸, 2011d, 「宗教革命としての民衆教育——キネの宗教的自由主義と共和主義」宇野重規・伊達聖伸・高山裕二編『社会統合と宗教的なもの——十九世紀フランスの経験』白水社, 165-200.
- , 2012a, [解説] 「革命史学の革命、そして革命の希望」「マチエの革命宗教論を読む——歴史社会学、政教分離、不安と希望」アルベール・マチエ『革命宗教の起源』(杉本隆司訳) 白水社, 5, 239-246.
- , 2012b, 「ヨーロッパの宗教」上智大学外国語学部編『ヨーロッパ研究のすすめ』上智大学外国語学部, 153-178.
- , 2012c, 「宗教」「カトリック」「プロテスタント」「ユダヤ教」「イスラム」「イスラムのヴェール」「ライシテ」「村の司祭と小学校教師」「医療——宗教とライシテの観点から」「国境なき医師団」田村毅・塩川徹也・鈴木雅生・西本晃二編『フランス文化事典』丸善, 80-87, 90-101.
- , 2012d, 「ライシテへの3つのアプローチ——マルセル・ゴーシェ、ジャン・ボベロ、ルネ・レモンの著作にみる研究動向の一断面」『宗教法』31: 79-99.
- , 2012e, 「ライシテの変貌——左派の原理から右派の原理へ?」『ソフィア』60-2 : 106-122.
- 田中拓道, 2012a, 「グローバル金融危機とヨーロッパのデモクラシーのゆくえ」『生活経済政策』183: 6-10.
- , 2012b, 「公と民の対抗から協調へ——19世紀フランスの福祉史」高田実・中野智世編『近代ヨーロッパの探求15 福祉』ミネルヴァ書房, 115-149.
- 速水奈名子, 2010, 「身体統制の変容——礼儀作法からイメージ・コントロールへ」西原和久・油井清光編『現代人の社会学・入門——グローバル時代の生き方(有斐閣コンパクト)』有斐閣, 223-236.
- , 2011, 「相互行為と身体——電子メディア社会におけるゴッフマン理論の可能性を問う」『社会学雑誌』(神戸大学社会学研究会) 27-28: 45-65.
- 三上剛史, 2012a, 「ディアボリックなものとシンボリックなもの——リスク社会の“危険”」『日仏社会学年報』21: 33-43.

- , 2012b, 「社会学と近代性の概念」丸山哲央編『現代の社会学——グローバル化の中で』ミネルヴァ書房, 82-83.
- , 2012c, 「社会学史というフロント——時代と競う」『社会学史研究』34: 87-91.
- 溝口大助, 2011a, 「マリ共和国南部カディオロ県セヌフォ社会における「婚姻」儀礼」『人文学報』(首都大学東京) 438: 1-34.
- , 2011b, 「一八九九年のモース——起点としての『供犠論』と「社会主義的行動」」モース研究会『マルセル・モースの世界』平凡社, 115-144.
- , 2012a, 「労働と思想⑭マルセル・モース——社会主義・労働・供犠」『POSSE』14: 168-185.
- , 2012b, 「死者と生者の入り口——マリ共和国セヌフォ社会における「前の石」儀礼」『死生学年報 2012』(東洋英和女学院大学死生学研究所) 185-216.
- , 2012c, 「マリ共和国南部セヌフォ社会における「祓除」儀礼」『人文学報』(首都大学東京) 453: 101-114.
- , 2012d, 「近代非洲妖術研究的发展——以非洲市场经济化为中心」(中国語版)『宗教人類学』民族出版社.
- , 2012e, 「夢の受動性と他者——マリ共和国南部セヌフォ社会における夢を事例として」河東仁編『夢と幻視の宗教史』リトン, 197-225.
- , 2012f, 「アゾペ Adzope」「アバングル Abengourou」「アビジャン Abidjan」「アボヴィル Agboville」「ヴリディ運河 Vridi Canal」「オジェンネ Odienne」「カティオラ Katiola」「ガニョア Gagnoa」「グランバッサム Grand Bassam」「グランラウ Grand Lahou」「コートジボワール共和国 Cote d'Ivoire」「コモエ国立公園 Komoe National Park」「コモエ川 Komoe River」「コロゴ Korhogo」「コング Kong」「ササンドラ Sassandra」「ササンドラ川 Sassandra River」「サンペドロ San Pedro」「セゲラ Seguela」「タイ国立公園 Tai National Park」「ダナネ Danane」「ダロア Daloa」「ディヴォ Divo」「ティングレラ Tingrela」「ディンボクロ Dimbokro」「トゥーバ Touba」「バンジエルヴィル Bingerville」「バンダマ川 Bandama Blanc」「ブアケ Bouake」「フェルケセドゥグ Ferkessedougou」「ブナ Bouna」「ブンジャリ Boundiali」「ポールブエ Port Bouet」「ボンドゥク Bondoukou」「マン Man」「ヤムスクロ Yamoussoukro」加藤博・島田周平編『世界地名大事典 3 中東・アフリカ』朝倉書店, 25, 43, 44-45, 60, 161-162, 205-206, 242-243, 248-249, 349, 358, 388-390, 395, 395, 404, 405, 424-425, 425, 456, 545, 567, 578, 595, 624, 641, 662, 795, 796-797, 821-822, 832-3, 845, 866-7, 922-3, 926-7, 977, 1047-8.
- , 2013a, 「モース宗教社会学の生成」『宗教研究』86(4): 755-756.
- , 2013b, 「セヌフォ社会における夫方居住集団ダアラの空間概念と実践」『人文学報』(首都大学東京) 468: 29-54.
- 山田陽子, 2012, 「パワーハラスメントの社会学——『業務』というフレーム、次世代への影響」『現代思想』臨時増刊号(緊急復刊『imago: いじめ——学校・社会・日本』) 40(6): 142-149.

§ 編集事務局より §

ニューズレター第 13 号をお届けいたします。2012 年も会員の皆様のご協力により、年 2 回の研究例会を開催することができました。2012 年 4 月には伊達聖伸会員のお世話により上智大学四谷キャンパスにて第 24 回の研究例会、10 月には藤吉圭二会員のお世話で高野山の別格本山大円院にて第 25 回の研究例会を開催することができました。研究例会では刊行百周年にあたる『宗教生活の原初形態』の再検討を中心に、アルヴァックスやタルドの理論についても知的刺激に満ちた報告と討論が展開され、議論は懇親会から二次会(四谷のバーや宿坊の和室)へと続きました。充実した時間を過ごす機会を与えていただいた開催校、報告者、コメンテーターの皆様には厚くお礼申し上げます。

さて、次回の第 26 回研究例会は、2013 年 4 月 13 日(土) 13:00 ~ 17:30 の予定で、多田光宏会員のご尽力により熊本大学黒髪北地区キャンパスにて開催いたします。今回の研究例会では、日本学術振興会の中倉智徳会員の報告(「ラトゥールとタルド——人類学の「静かな革命」とモナド論」)につづき、「デュルケーム没後百周年企画」の検討を予定しております。会員の皆様のご参加をお待ちしております。